

中国・韓国から教職員各 100 名を招へい

教育現場の交流から相互理解と友好促進へ

文：佐々木万里子・鈴木薫（企画課）

ACCU が 2000 年から毎年実施している教職員招へいプログラムは、平成 15 年度も中国と韓国から、それぞれ約 100 名の現職教職員等を日本に招へいして行われた。

参加者は約 2 週間にわたり、教育現場の視察等を行い、日本の教育制度を学ぶとともに、日本文化への理解を深め、両国と日本の相互理解と友好を促進する所期の目的を達成し、帰国の途についた。以下、それぞれのプログラムについて報告する。

2003年中国教職員招へいプログラム (2003年11月26日～12月9日)

日中国交正常化 30 周年を記念して実施された前年に続き、文部科学省ならびに中国教育部の協力のもと、中国全土の小・中・高校、特殊教育学校、そして各地教育行政機関から参加した教員ら 100 名は、都内での 5 日間の活動の後、グループに分かれ、熊本、愛知、島根、徳島の各県の学校等を訪問し、最後に大阪に集合してプログラムを終了した。

学校訪問では、見学した中国語の授業で、生徒からたくさんの質問を受け、小学校では給食を食べながら児童と語り合った。また、地域に伝わる伝統芸能を習う生徒たちの真剣な眼差しや、手作りの中国国旗を元気一杯に振って、参加者



熊本県山鹿灯籠踊りを披露した生徒と中国教員

を歓迎する児童の姿には、特に感動していた。日本の学校教育の印象として、中国に比べて勉強だけでなくクラブ活動や社会活動にも力を入れて情操教育も重視していること、また、生徒と教員が打ち解けた雰囲気の中で授業が行われ、子どもが勉強を楽しめるように工夫されていることを挙げていた。

参加者は、全ての視察において常に意欲的で、特に日本人教員との意見交換や、児童・生徒と言葉を交わす際の温かく積極的な姿は、非常に印象的であった。また、多くの学校において、「熱烈歓迎」という大きな文字が参加者を出迎え、中国との交流にかける日本側の熱意もいたるところで強く感じられた。

第4回韓国教職員招へいプログラム (2004年1月29日～2月10日)

今年で 4 回目を迎える韓国教職員招へいプログラムでは、韓国ユネスコ国内委員会の協力のもと、韓国全域から集まった 99 名の小・中・高等学校の教職員が日本を訪れ、東京、奈良での全体活動と北海道、静岡県、大分県、愛媛県での 1 週間にわたるグループごとの活動が行われ、学校、文化教育施設、家庭訪問などの受入れ側の全面的な協力のおかげで成功裡に終了した。

韓国の教育制度は日本と共通する部分も多いため、関心は高く、各県の訪問先ではクラブ活動や塾、国際交流、教育現場での IT 化、少子化への対応など具体的な質問が数



算数の授業に参加する韓国教員

多く出され、時間がいくらあっても足りないほどであった。また、学校訪問の際に韓国文化を紹介する時間を設け、児童が韓国の遊びを体験したり、民族衣装を着せてもらったりと直接韓国文化に触れたことも大変好評だった。受入れ側も日本文化の紹介に知恵を絞ったり、この機会に韓国語を学ばせたりと、国際交流への熱意が感じられた。

両プログラムとも 2 週間弱の滞在とはいえ、日本の教育現場や家庭を直接訪問し、触れあい、感じ、話し合った意義は大きい。参加者が中国、韓国に戻ってから、日本での経験を活用することはもとより、双方の学校や教師とのネットワークを活かしてさらに活発な相互交流を行い、持ち帰った友好のつぼみが花開くことを願うものである。

最後に、両プログラム実施にあたってご助力を頂いた各県の教育委員会並びにご関係の方々改めて感謝の意を表したい。